

ブラジルの高齢化と老年学（異文化言い分EVEN）

著者	Lopes Andrea
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	181
ページ	51-52
発行年	2010-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004409

ブラジルの 高齢化と老年学

アンドレア・ロペス



ブラジルはすでに若い社会ではない。先進諸国と同様にブラジル社会は高齢化の一途をたどっている。今日、六〇以上の年齢の人は人口の一〇%を占める。この数字は日本の二三%という数字から見ればまだ低いが高齢化はブラジルでは大きな問題になっている。ブラジルの高齢化の現状と二〇世紀に発達した老年学 (gerontology) の関係を簡単に紹介しようと思う。

老年学は生物学、社会学、心理学、経済学などを取り込んだ比較的新しい学際的な分野である。老年学は人間の誕生から老いていく過程を対象とし、高齢の人々を社会的な分類において研究

する。二〇世紀、ブラジルでは人口構成に非常に大きな変動が起こり始めた。しかしながら高齢者の数の多さだけが社会的問題になっているのではない。老年学の発展の経緯を見ると、高齢者の人口がどんどん増加しているということだけではなく、二〇世紀後半にさまざまな組織や経済主体の間で高齢化や高齢人口への関心がたかまってきたことによりブラジルにおいて高齢化と老年学の二つがたいへん重要なトピックになっていくことがわかる。

ブラジルの高齢化問題を専門に取り扱う最初の組織は一九六一年に設立されたGeriatric and Gerontology Brazilian Society (www.sbgg.org.br)である。当時の主要な三つの成果は、①ブラジル社会に高齢化が社会的に重大な問題であるという認識をブラジル社会に浸透させたこと、②高齢化と高齢人口の研究の必要性を専門家や研究者に喚起させたこと、そして③老年学を学術分野にまで発展させたこと、である。これが端緒となり政府系、非営利団体系、政党関係、教育関係、そして営利を目的とする組織が多く設立され高齢化をテーマにした様々な提言が相次いだのである。余暇、観光、文化、教育サービスの分野で高齢者への機会提供を提案した最初の団体は一九六三年に設立されたCommerce Social Service (www.sesc.com.br)である。

二〇世紀後半は法律や公共福祉の面でも新しい展開を見せた。一九八八年に新しい連邦憲法「市民憲法」と呼ばれている一が公布され、「高齢者国家政策」が導入された。これはブラジルの高齢者を対象とした最初の法律である。これと並び、「高齢者法」と呼ばれる基本的な法令が二〇〇三年に施行された。この三〇年間、専門家、研究者、

国内外の関係機関、メディアなどの研究成果や提言に刺激されブラジルの高齢者は権利や利益の享受、社会参加に向けて大変精力的に活動している。新しい連邦憲法によりブラジルの高齢市民の状況を改善している事例として二つの制度があげられる。「統一健康制度」(Unified Health System) (www.saude.gov.br)と「統一社会扶助制度」(Unified Social Assistance System) (www.mds.gov.br/suas)である。双方とも一人一人のこみいった事情を踏まえ異なった要望に応じて健康、社会補助を提供している。高齢者はシニア・センター、コミュニティ・ハウス、長期滞在型住宅、病院、在宅健康支援のサービスを利用することができる。しかし、両制度ともに高齢に関する専門知識を身につけた職員の充実や財政補助の面で改善すべき点は大きい。

一九九七年、カンピナス州立大学 (www.unicamp.br) は、アニタ・リベラレソン・ネリ博士の主導のもと大学院にブラジル初の老年学の修士課程を設立した。このカリキュラムからは高齢化に関する多面的な研究成果が生み出されている。また二〇〇五年、サンパウロ大学人文科学部は老年



ブラジルの高齢者たちとともに

学の学十号授
与を始めた
(www.each.
usp.br)。こ
の学科では卒
業後、高齢者
とともに仕事
する職場に就
くことを希望
している若い
学生たちにこ
れまでなじみ
のなかった



サンパウロ大学老年学講座で学ぶ学生とともに

テーマでの調査研究や職業体験をさせている。ブラジルでは高齢化の論文を載せる自然科学分野のジャーナルもある。例えばThe Third Age Journal, Inter-Disciplinary Study On Aging, Brazilian Journal of Human Aging Science, and Geriatric and Gerontology Brazilian Journalがある。ブラジルにおける高齢化を知るうえでもう一つの重要な動きは今世紀に入って国が行った二つの調査である。第一は二〇〇六年に国内二〇四の都市に住む六〇歳以上の人、二二三六人に行ったインタビューである (www.sescsp.org.br/sesc/hotsites/pesquisadosos2007/prefacio.asp)。第二は二〇〇八年に開始されたFragility on Aging or Fibra Networkという調査であり、ブラジルの大学数校が作業援助を、連邦政府が財政支援を行っている。

この調査では全国の八〇〇〇人の高齢者に対しインタビューを実施することを目標としている (www.unicamp.br/unicamp/

unicamp_hoje/jornalPDF/ju383pag09.pdf)。最後になったが、ブラジルの大学の多くが「第三年代大学」(University of Third Age)というプログラムを実施している。この教育プログラムでは地域に住む高齢者が様々な大学の授業を受講できる。シニア向けに組んだコースもあるし、学部のカリキュラムのクラスにも参加できる。

現在、ブラジルはより良い高齢者社会の実現を模索している。一緒に生活する家族がおらず、所得が低く、健康状態も良くなく、精神的にも弱くなり、孤独な状態にある高齢者は多い。これらの問題があるものの、国民全体を眺めると六〇歳以上の人たちは一つの社会集団として捉えた場合、数的には大きい若い世代の集団よりは大変恵まれていると言えよう。家庭によっては、食費や家賃など家計を支えているのは高齢者であったりする。なぜなら彼らはまだ働いており、また場合によっては年金も受け取っているからだ。(ブラジルでは退職後も働くことが認められている。)彼らの世代は金を蓄え、家を購入し、条件の良い仕事に就き、多く年金を受け取ることができる、など恵まれた機会を享受できる豊かな時代のブラジルで若いときからより安定したエイジング・プロセスを歩むことができたからである。同様のプロセスが現在のブラジルの若者世代にも起こっているとは言えないのだ。息子や娘が失業すると彼らは自分たちの子ども達をつれて両親の家に戻る。そうなるシニアの親たちは三世代の家族全員を養わなければならない。社会の利益という観点で、慢性的な社会的不平等、長寿化、限られた就職機会、加えて多くの若者が年金保険料も支払わずにインフォーマルな職に就いているという現状を考えるとブラジルは現在また今後も、「世代



Fibra Network調査チーム

間戦争」と呼ぶ時代にあると言えよう。

私は、教師としてまた研究者として老年学が有効な回答をもたらしてくれることを切望しそのために努力している。それは、有能で創造的発想を生む人材の育成、高齢化についての全体観的知恵の構築と共有、老化予防対策の普及、政策面での議論、国際社会の協力、そして最後に加齢の進行にそって人々が刺激しあいながら有意義で健全な社会参加ができる仕組みに自らが関与していくことを通じて実現できるだろう。我々は昼から夜へ変わるように突然老人になるわけではない。自分たちが得た経験と自分たちが選ぶ生活スタイルを通じて老いるのである。なぜならば日々暮らすこと〓老いていくこと、だからである。

Andrea Lopes, Ph.D. / 海外客員研究員 andrealopes@usp.br
Assistant Professor at University of Sao Paulo, Brazil School of Arts, Science and Humanity

出身：ブラジル
研究課題：Volunteer Work and Aging: A Comparative Study among American, Brazilian and Japanese Seniors
滞在期間：2010年8月～2011年1月
専門：人類学、老年学